

令和三年度卒業研究発表会要旨の巻頭にあたって

高田 一成（筑波大学 生物学類 4年）

4年という時間は長いようで短く、生物学類卒業研究発表会で卒研生として発表する立場となった今でも、入学式が昨日のことにように思えます。しかし、この間に経験した様々な出来事を振り返ると、確かに生物学類で過ごしてきた4年間を実感できます。

1年生で受けた基礎生物学実験に衝撃を受けたことは、今でも覚えています。それまで映像でしか知らなかった機器を実際に操作できることに感動しました。また、これまでは教科書で習っただけであった様々な生命現象が実際に目の前で起きていることに心を打たれました。

私たちが生物学類で過ごしている間に起こった出来事の中で最も影響が大きかったことのひとつが、新型コロナウイルス感染症のパンデミックかと思えます。同じ教室で仲間とともに授業を受けること、学園祭などの行事が普通に開催されることなど、これまで当たり前だと思っていたことが当たり前でなくなり、平凡な日常のありがたさを実感しました。

卒業研究発表会に初めて参加したのは、学部1年生の時で、発表されていた先輩方の背中が非常に大きく見えました。どの発表も素晴らしいものでしたが、私の知識不足から、理解するには時間がかかり、同時に生物学をより深く学びたいと思いました。

2年生や3年生の時、私は準備委員として卒業研究発表会に参加しました。先生方や先輩方に仕事を教えていただきながら、会場の設営や当日の運営にあたりました。発表を終えた卒研生から「ありがとう」と声をかけていただき、非常に嬉しかったです。

昨年度、私は卒業研究発表会準備委員会の総括として携わりました。そんな折、新型コロナウイルス感染症の影響で、卒業研究発表会は、生物学類史上初めてのオンライン開催となり、数多くの課題が浮かび上がりました。しかしながら、先生方や卒研生の皆様、準備委員の皆様、座長団を務められた学生の皆様をはじめ

とした多くの方々のご協力により、無事に開催することができました。あれから1年が経過しましたが、この場を借りて心から感謝申し上げます。

学年があがって時が経っているにも関わらず、一向に小さくならない、むしろ大きくなっているように感じられる先輩方の背中を追っているうちに、私も4年生になりました。大学に入学した頃は雲の上の存在だと思っていた卒研生に、気がついたら自分になっていました。

研究は、それまで私が想定していたものよりはるかに難しいもので、思うように事は進みませんでした。実験結果から課題と解決策を考え、先生方にご指導いただきながら、試行錯誤を重ねました。同時に、自分の知識不足と生物学の奥深さを日々痛感しました。それだけに、結果から新たな発見が得られたときの喜びは、非常に大きなものでした。

卒業研究発表会では、私たち卒研生が1年間努力した卒業研究の成果を発表させていただきます。その成果の奥には、卒研生一人ひとりの苦勞があります。皆様には、私たち一人ひとりが生物学類で過ごした4年間に思いを馳せながら発表を聞いていただければ幸いです。

生物学類での学びにより、私たちが世界を見る目は変わりました。入学した頃に見た景色と今私たちが見ている景色は同じでも違って見えることと思います。

最後になりますが、4年間に渡り、様々な講義や実験、実習、そして卒業研究等を通してご指導いただきました先生方に、深く御礼申し上げます。また、コロナ禍で先が見通せない中、私たちのために卒業研究発表会の準備をしてくださった学生の皆様にも感謝申し上げます。

Communicated by Tomoyuki Yokoi, Received January 26, 2022.